みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

No.222

令和７年５月１日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
ＴＥＬ　０９３０－３３－４６６６
ＦＡＸ　０９３０－３３－４６６７

博物館休館日カレンダー 2025年 5月

日	月	火	水	木	金	土
27	28	29	30	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

休館日　※情報はR7.4.18現在

◆博物館NEWS

今年の「楽・山笠・神楽」公開情報

春の民俗芸能シーズン到来！

4月から5月は春のお祭シーズン。祭につきもののさまざまな民俗芸能が、今年も町内各所で奉納・公開されます。

とりわけこの地域で「楽・山笠・神楽」と呼ばれる民俗芸能は一般には「風流踊」・「山・鉾・屋台行事」・「神楽」と呼ばれ、みやこ町のものは含まれないながら、そのいずれもが日本を代表する伝統文化としてユネスコの無形文化遺産に登録（あるいは登録見込）されています。

身近すぎてその価値に気付きにくい民俗芸能ですが、視点を変えるとその価値を世界レベルで感じることも可能です。この時期、改めてふるさとの民俗芸能をじっくりご覧になってみてはいかがですか？

5月以降の公開民俗芸能

●光冨神楽（豊前神楽）
・3日（土）19時～
於：徳矢神社（みやこ町光冨）

●横瀬神楽（豊前神楽）
・2日（金）19時30分～
於：下木井公民館（犀川木井馬場）
・3日（土）19時～
於：横瀬公民館（犀川横瀬）

●「生立八幡神社山笠」行事
・10日（土）行山　16時頃～
・11日（日）戻山　15時頃～
於：神社周辺（犀川生立）

▲昨年の山笠の奉納・公開の様子

※時間はおよその目安です。天候や主催者都合で、予告なく変更となる場合があります。
※公開中止や終了分は紹介していません。

◆講座・教室・催し物ガイド

5月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
5月3日（土）9時30分～
【古文書講座】
5月10日（土）10時～
【古典かな講座】
5月17日（土）9時30分～
【みやこ学講座】
5月24日（土）10時～

※見学会等は別途ご案内します。
※日程等変更となる場合があります。

博物館友の会で「楽習」を！

博物館友の会は「故郷を楽しく学ぶ」をモットーに、見学会や各種イベントを行い、お陰様で今年で設立30年を迎えます。関心のある方なら町内外を問わず、どなたでも参加OK。気軽にお申込を！

♪入会の方法
博物館窓口で登録・会費納入

♪年間会費
・個人会員　3000円
・家族会員　一人　2000円

♪お問い合わせ先
博物館　☎33-4666

3・4月の業務日誌から

▲先陣を切って力強い響を届けたかつやま太鼓のみなさん

3月1日（土）、サン・グレートみやこで文化芸能フェアが開催されました。博物館も文化芸術活動支援のため応援させて頂きましたが、子どもから大人まで、充実の舞台発表が続きました。参加・運営の皆さんお疲れ様でした！

▲古代から昭和まで11篇の研究レポートを掲載

3月31日（月）、みやこ町郷土史研究会さんから「郷土誌みやこ」第19号を献本頂きました。今年も会員の調査レポートが満載の充実の一冊です。博物館でも販売取扱していますのでお気軽にお声がけください。

▲写真撮影時は絶え間ない花吹雪に見舞われました

4月2日（水）、福岡県指定天然記念物「千女房のヤマザクラ」が満開を迎えていました。

今年は例年に比べて遅めの開花でしたが、3月下旬の暖気で近隣のソメイヨシノと競うようにして満開を迎えていました。

▲写真は、吉田増蔵が故郷（みやこ町）を偲んで詠んだ漢詩の屏風

今年が「昭和100年」の節目の年に当ることから常設展示室の「先人の殿堂」コーナーで現在、元号「昭和」を考案した吉田増蔵と故郷とのつながりがみられる資料を展示しています。是非、ご覧ください！

みやこの歴史発見伝 176
「宇佐神宮創建1300年」とみやこ町

「僧」の姿をした「神様」

例年、大型連休後の土日に生立八幡宮（みやこ町犀川生立）の神幸祭で、福岡県指定文化財「生立八幡神社山笠行事」が行われます。（本年は5月10日～11日実施予定）。福岡県下最大規模を誇る曳山など豊前地方を代表する山笠行事で、高さ約20m、総重量約3.5トンを量る巨大な山笠が移動する姿は圧巻の光景で、町内外から多くの見学者が訪れます。この生立八幡宮の「ご神体」として明治時代まで祀られたのが「僧形八幡神坐像」です。寄木造りで顔の一部に金箔が残るこの像は、みやこ町国作に位置した豊前国（現在の北九州市から大分県宇佐市に該当する行政範囲）の国府（現在の都道府県庁）の国司（現在の県知事に該当）を務めていた宇奴首男人が養老7年（723）に奉納したと伝えられ以後、この神社に鎮座してきました。この像は、その名が示すように、髪を剃り、袈裟を身に着けた僧の姿（僧形）をした御神体（八幡神）で、「仏の姿をした神様」という、2つの宗教が一つの像に現わされた世界的にみても大変珍しい「ご神体」なのです。神と仏が融合した「神仏習合」の信仰のルーツは「八幡宮」の総本宮である「宇佐神宮」に辿ることができますが、この宇佐神宮は、本年（2025）で創建1300年を迎えます。今回は、宇佐神宮創建の背景に、このみやこ町が深く関わっていたことを詳しくご紹介します。

福岡県指定文化財僧形八幡神坐像
（生立八幡宮）

「八幡宮」について

「八幡宮」は八幡神を祭神とする神社で、その数は全国で4万社以上を数えることから、社の数では国内最多で、その分布も北海道から沖縄まで広範囲にみられます。この「八幡宮」の「総本宮」が宇佐神宮（大分県宇佐市）です。代表的な八幡宮として宇佐神宮のほか、石清水八幡宮（京都府八幡市）、筥崎宮（福岡県福岡市）、鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）があります。名称の「神宮」（宇佐、熱田、伊勢神宮など）は天皇やその先祖を祀る神社を示す最上級の「社号」です。宇佐神宮は、古くは伊勢神宮と並ぶ神社として日本最大の神社信仰に位置付けられ、またみやこ町を含む「豊前国」の「一宮」でもあります。

天皇の即位や国家の大事等の際に天皇から特別に派遣される使者を「勅使」と呼びますが、勅使を迎えることができる神社は全国でも僅か17社に止まります。現在、宇佐神宮では、10年に一回、この勅使の参拝が執り行われていますが、本年はこの参拝行事が執り行われる年でもあります。紫式部の夫、藤原宣孝は長保元年（999）11月に宇佐神宮に派遣される勅使「宇佐奉幣使」に任命されていますが、彼もみやこ町にみられる官道を通って宇佐へ向かったものと思われます。

「八幡神」とは

豊前国内に位置する大分県中津市の薦神社は、国内でも珍しく境内にある「三角池」という古代の池が「ご神体」として祀られています。この池は、渡来人によって築かれた堤を備え、この堤の発掘調査では、樹木の枝葉などを敷き詰め基礎の滑りを押さえる「敷粗朶」が検出されるなど池田遺跡（みやこ町勝山池田）との共通点がみられる古代の池です。八幡神の由来を記した『八幡宇佐宮御託宣集』（以後託宣集）には、「薦神社は宇佐神宮の祖宮であり、その八幡神のご神体は三角池に自生する薦を刈り取って御枕としたものである」という記述をみることができます。薦とは、真菰（イネ科マコモ属の多年草）を指し、これを刈り取って枕状にした依代（巨石や榊など神霊が依り憑く対象物）が「薦枕」です。奈良時代の養老4年（720）九州の薩摩、大隅を中心に勢力を拡大していた「隼人」が乱を起こします。これを鎮圧するために九州に向かったのが、「令和」の歌を詠んだ大伴旅人です。「令和」の元号で歌人のイメージが定着している旅人ですが、武人としても大きな功績を残しており、乱の鎮圧に際し、征隼人持節大将軍に任命され、一万人の兵を率いて九州へ向かいます。

この時、戦勝祈願のため、薦神社の真菰で八幡神の依代「薦枕」を作りますが、『託宣集』の中に「豊前国司に仰せつけられ、初めて神輿を作らしむ」という記載があります。この当時の豊前国司は生立八幡宮に「僧形八幡神坐像」を奉納した宇努首男人ですが、大切なご神体「薦枕」を乗せるための神輿を作り、これを奉じて日向まで行幸し、乱を鎮めたと伝えられています。この時、用いられた「神輿」が現在各地でみられるお神輿の起源ともいわれています。

この乱には豊前国から数多くの住民が兵士として参加していますが、一説にその際に用いた軍旗（幡）を依代としたことが「八幡」の名の由来とみられています。この乱をきっかけに八幡神には戦勝を願う「軍神」の側面と併せ、隼人の霊を鎮めるために仏に救いを求める「神仏習合」という八幡信仰を形成しながら、神亀2年（725）宇佐八幡宮が現在の地に創建されたと伝えられています。

法蓮と元命

この乱に同行した「法蓮」という僧侶は、宇佐神宮内に造営された弥勒寺という寺の初代別当（寺務を統括する長官）を務め虚空蔵寺（大分県宇佐市）を創建したことで知られています。この虚空蔵寺では、この地域の古代寺院としては唯一、塼仏（タイル状の仏像）が出土しています。塼仏は、『西遊記』の玄奘三蔵ゆかりの寺院である中国の慈恩寺大雁塔周辺から多数出土しており、これが奈良の寺院に伝えられ、法蓮が宇佐に伝えたとみられます。この虚空蔵寺の塼仏と同じ鋳型で作られた塼仏が豊前国分寺付近の遺跡から出土していますが、虚空蔵寺以外では確認されていない貴重な塼仏の出土は、宇佐とみやこ町との強い結びつきを裏付ける資料として注目されるものです。その後、天平勝宝元年（749）12月末には、豊前国分寺（みやこ町国分）を含む全国に造営された国分寺の「総国分寺」である東大寺の大仏建立成功のため、宇佐の八幡神は、全国の神々を率いて奈良に入ります。これをきっかけに海外から伝来した仏と日本古来の神々をつなぐ新しい国家神としての地位を確立し、また広く民衆に関わりながら独自に展開・発展を遂げました。

平安時代に入ると、時の権力者であった「藤原道長」が護国神として八幡神を重要視しますが、この当時、宇佐神宮は、九州における登録田数のうち、約3分の1を所有していたものと推察されています。この時、宇佐弥勒寺の講師（寺家の長官）を務めた「元命」という僧侶が藤原道長から特に厚い信任を得て治安3年（1023）には、当時の都であった平安京の南西側を守る重要な神社として建立された石清水八幡宮（京都市）の別当（長官）に任命されています。彼の祖父は豊前国府で国司の三等官、父は豊前国分寺の講師を務めたと伝えられることから、彼自身もみやこ町豊津周辺の出身とみられています。

「豊国」の拠点は？

「豊国」（豊前・豊後）の由来について、奈良時代の養老4年（720）に完成した『日本書紀』には、景行天皇が九州巡幸の際に、仲津郡の中臣村（現在のみやこ町国作から田中周辺地域に推定）で慶事が起きたことに因み、この地を「豊国」と名付けたことが記されています。また、みやこ町の史跡の分布や発掘調査の結果などから、7世紀頃まで豊前、豊後を含む「豊国」全域の中心となったのは、みやこ町国作から田中周辺地域とみられています。その後、「豊国」が豊前、豊後に分かれた8世紀頃から、宇佐八幡宮を中心に国東に及ぶ豊前東部地域では、宗教文化の一大拠点が形成されます。その一方で、天皇陵級の古墳や国府が設けられたみやこ町は、宇佐を含む豊前国の政治・文化の重要な拠点となり、これが「京都」の地名の由来とする研究者の見解もみられます。このように1300年前の宇佐神宮創建の背景を探ってみると、みやこ町の史跡や人物との深い関係を伺うことができます。

（井上信隆）